

● 東 北

工 藤 一 郎

東日本大震災から5年目となったが、心の復興に寄与しようとする音楽家及び音楽関係者たちの熱意と活動は衰えを見せない。内、震災直後に任意団体として立ち上げられ、2014年に公益財団法人化された「音楽の力による復興センター・東北」（以下、復興センター）の活動の中心をなす「復興コンサート」は2015年9月に500回に達し、鑑賞者数も10万人の舞台をとうに超えている。

他の個人や団体による同様の活動も継続されている中、この年最大のイベントとなったのが「第5回1000人のチェロ・コンサート」（5月24日、ゼビオアリーナ仙台／実行委員会主催）。阪神淡路大震災から3年後の1998年に神戸で行われたのがこのイベントの第1回で、第5回仙台のテーマは「震災犠牲者の鎮魂と復興支援」。地元の仙台フィル・メンバーを含むプロ、アマ計851人（内、海外79人）が大合奏を繰り広げた（指揮：田久保裕一、ゲルノート・シュルツ）。

これらの活動が当初から旨としてきたのは、被災者への「寄り添い」「慰め」「励まし」などであろうが、最近、その次の段階に踏み出した動きも見られる。

その典型例が子供対象の体験型イベント「こどもの夢ひろば“ボレロ”」（8月1・2日、日立システムズホール仙台／実行委員会主催）。被災地での慰問演奏を続けてきたピアニスト小山実稚恵が、「本当に必要なのは新たな一歩を踏み出す勇気や前進する力なのではないか」と思い至った事が企画の発端。小山自身が出演するとともにゼネラルプロデューサーを務め、コンサート（指揮：大野和士、管弦楽：仙台フィル。他）と各種イベントで構成された。初日の夕刻からは2つの協奏曲を含んだ「小山実稚恵30周年記念コンサート」も行われ、全公演チケット完売の盛況となった。

もう一つの例は、仙台フィル・コンマス西本幸弘が2014年に開始したリサイタル・シリーズ「VIOLIN able ～ディスカヴァリー～」。ベートーヴェンの10曲のヴァイオリンソナタを10年かけて演奏するというものだが、「発見する喜びが、ひいては復興への力につながる」との信念を「ディスカヴァリー」に込め、リサイタルに先行して、被災した子供たち対象のワークショップを実施している。この子供たちはリサイタルに招待される。2015年にはその第2回が行われた（12月11日、宮城野区文化センター・パトナホール／ピアノ：大伏啓太）。

ところで、東日本大震災は2008年のリーマンショック以来の景気停滞に追い討ちをかけた形となり、全国のオーケストラに厳しい環境をもたらしたが、東北の2つのプロ・オーケへの影響は特に大きい。端的な表れが企業からの依頼公演の減少。それは比較的規模の小さい山響（公益社団法人）に相対的に大きく響いた。

運営側としては当初、土・日の2日公演だった定期演奏会を音楽監督・飯森範親が担当する回のみとし、楽団員の賞与もカットするなどの緊縮・縮小策をとった。これに対しては、2014年に設けられた山響活性化委員会から「定期での演奏の評価を高めることで山響の存在価値をアピールし、集客や依頼公演の

獲得につなげるべきだ」との考えが示された。以後は積極策に転じ、2016年度からは2日公演に戻される事になっている。加えて2015年度から、元関西フィル理事・事務局長で同団の経営を立て直した西濱秀樹が専務理事・事務局長に就任し、強力なリーダーシップで数々の改革を推進している。

ただ、このような諸々の動きが演奏の質に影響したことはない。音楽監督：飯森範親、首席客演指揮者：鈴木秀美、同：ミハウ・ドヴォジンスキ、正指揮者：大井剛史他によって充実した定期公演が行われているほか、モーツァルトの全交響曲を8年かけて演奏する「アマデウスへの旅」シリーズが大きな音楽的財産を築いて完結した（2月14日、山形テルサホール）。

仙台フィル（公益財団法人）は、常任指揮者：パスカル・ヴェロ、首席客演指揮者：小泉和裕、ミュージック・パートナー：山田和樹他による大編成オーケの性能を活かした定期公演で聴衆を引きつけている。内、2016年4月に迎える第300回（指揮：パスカル・ヴェロ）を仙台と東京（サントリーホール）で行うべく準備が進められている。他に近年、定期演奏会に準ずる内容のコンサートが（公財）仙台市市民文化事業団他主催で行われるようになり、今では「オーケストラ・スタンダード」シリーズとして定着している。指揮者、楽団員、事務局が一丸となって聴衆との交流に努める姿も印象的。

2006年のスタート以来“せんくら”の愛称で親しまれている「仙台クラシックフェスティバル」（主催＝仙台市、仙台市市民文化事業団、他）が10回目を迎えた（10月2～4日）。2011年の第6回から掲げられているメインテーマ「音楽とともに前へ・仙台」のもと、市内外から震災後最多となる延べ37,400人のファンを集めて盛況だった。前記「復興センター」は主催者陣の一角を占めて「街なかコンサート」（無料）を担当。被災地のいくつかの音楽団体を出演させるとともに他の有料公演への招待も行った。

2015年はオペラ公演が活況を呈した。内、仙台フィル特別演奏会として演奏会形式で上演された《椿姫》（7月18日、東京エレクトロンホール宮城／指揮：山田和樹、管弦楽：仙台フィル、他）は、オペラとして十分に楽しめただけでなく、佐々木正利に率いられた「熊友会ヴォーカルアンサンブル」の強靱な表現力と確固たる存在感が深く印象に残った。仙台オペラ協会創立40周年記念公演《カルメン》（9月5・6日、東京エレクトロンホール宮城／指揮：佐藤正浩、管弦楽：仙台フィル、演出：伊香修吾。他）と、全国共同制作プロジェクト《フィガロの結婚》（10月29日、山形テルサホール。11月1日、名取市文化会館大ホール。／指揮：井上道義、管弦楽：山響、演出：野田秀樹、他）は、独自の解釈による大胆な演出で観客の思考回路に斬り込んだ。

室内楽では、2014年に仙台フィル・ソロ首席チェロ：三宅進が監修してパトナホールで開始した「Music from PaToNa」シリーズが2年目に入り、依然好調に継続中。10月にはその第2章の活動と成果に対して（公財）サントリー芸術財団より「第4回ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞」が贈られた。三宅個人としてもリサイタルを行い（11月29日、日立システムズホール仙台。ピアノ：加藤昌則）、アンサンブルのプロであると同時に卓越したソロ演奏家でもある事を見つけた。

リサイタルではもう一つ、ヴァイオリンの郷古廉（多賀城市出身）とピアノの津田裕也（仙台市出身）による「DUOリサイタル」（7月13日、日立システムズホール仙台）を挙げておきたい。考え抜かれたプログラム構成、高い技量と極上の感性に裏打ちされた超高水準の演奏。